

みんなのいきいき同窓会：改革の基本理念 HPが果たす役割

いきいき同窓会は、会員一人ひとりの参加によって成り立っています。最も優先すべきなのは、一部の役員が素晴らしい企画を立案することではなく、すべての会員が「参加することが楽しい」「ここが自分の居場所だ」と心から感じられる、温かく活気のある環境を育むことです。

現状ではいくつかの課題により、その理念が揺らいでいます。

- 会議の形骸化と情報格差：一部の役員だけで議論が進み、その内容も十分に伝わらないため、多くの会員が「自分には関係ない」と感じてしまいます。情報から疎外されることが無関心を生み、その無関心がさらに会議を形式的なものにしてしまうという悪循環に陥っています。
- 会員の「お客様」化：会員が活動の受け手（お客様）になってしまい、「自分たちが会を動かしている」という当事者意識が薄れています。自ら何かを提案するよりも、運営からの知らせを待つ姿勢が常態化し、組織全体のダイナミズムが失われつつあります。
- 活動のマンネリ化：伝統的なイベントが、新しい会員や多様な興味を持つ人々にとって、やや参加しづらい雰囲気になっているかもしれません。「参加しなければ」という義務感が、「参加したい」という純粋な楽しみを上回ってしまえば、コミュニティの魅力は半減してしまいます。

これらの課題を解決し、コミュニティを再び活性化させるため、すべての改革は「参加のハードルを徹底的に下げ、楽しさを最大化する」という視点で行われるべきではないか。

改革のエンジン：「全員参加」を促すホームページ（HP）活用戦略

HPは単なる情報伝達ツールではありません。会員一人ひとりを「会の主役」にするための、重要なプラットフォームです。

1. 「見る・聞く議事録」で、誰もが議論の輪の中へ：
 - 会議の議事録や要約動画を迅速にHPで共有することは、単なる情報公開以上の意味を持ちます。それは、情報格差をなくし、すべての会員が「自分もその議論に参加している」と感じられる土台を作ることに他なりません。
 - 「何が決まったか」だけでなく、「なぜそうなったか」のプロセスを共有することで、会員は決定に対して納得感を持ち、自発的な協力をしやすくなります。例えば、スマートフォンで5分間の要約動画を見るだけで、会議の核心を理解できる手軽さは、多忙な会員を議論の輪に引き込みます。
2. HPを「双方向の広場」に：
 - HPを起点に情報発信することで、「まずHPを見る」という文化を醸成します。これは、会員が常にコミュニティと繋がっている状態を作り出し、一体感を育む上で不可欠です。
 - 将来的には、HP上で「次はどんなイベントに参加したい？」といった簡単なアンケートを取ったり、匿名の意見箱を設置したりすることで、会員が自分の声が会に届き、尊重されていると実感できる双方向のコミュニケーションを目指します。
3. 「私たちの成果」の可視化：
 - 会報の内製化によるコスト削減や「モルック」の導入といった体験をHPで共有することは、「役員が頑張っている」という報告ではなく、「みんなで会を良くしている」という共同体験の証となります。自分たちの小さな行動が大きな成果に繋がったという実感は、次の行動への力強いモチベーションに繋がります。

イベント改革:「見る」から「参加する」へ。みんなで創るお祭りを目指して

イベント改革の目的は、単に内容を新しくすることではありません。より多くの会員が、より多様な形で「参加」できる仕組みを作り、そこから生まれる自然な交流を大切にすることです。

- 参加のハードルを徹底的に下げる → 「誰でも主役になれる」
 - 個人参加や「趣味の作品」の出品を歓迎することで、「特別な技術がなくても、自分も主役になれるんだ」というメッセージを発信します。思い出の一枚の写真とそれにまつわる短いエピソード、心を込めて作った手芸品など、専門性よりも「共有したい」という気持ちを尊重することが、参加への心理的な壁を劇的に低くします。
- 「体験」の要素を取り入れる → 「創る楽しさ」の共有
 - 水墨画や川柳などのワークショップは、これまで「見る」だけだったイベントに「自ら手を動かし、創り出す楽しさ」という新しい参加の形を提案するものです。普段は物静かな会員が、得意な分野でいきいきと講師を務める姿は、新たな尊敬や交流を生むきっかけになります。
- イベントの「掛け算」 → 「偶然の出会いと楽しさ」の創出
 - 「作品展」と「ミニ芸能大会」や「バザー」を組み合わせることで、自分の専門分野以外の楽しさに偶然出会う機会が生まれます。「書道の作品を見に来たつもりが、隣で開かれていたバザーの活気に引き込まれ、新しい友人ができた」といった体験が、コミュニティへの愛着を何倍にも深めます。
- ユーモアと親しみやすさ → 「笑い」による一体感
 - 役員の「今は昔写真展」のような企画は、役職や立場を超えた「人となり」に触れる機会です。若かりし頃の写真を見て、共通の話題で笑い合う体験は、組織に温かい一体感をもたらし、見えない壁を取り払ってくれます。

これらの施策はすべて、「役員が会員のために何かをしてあげる」という構造から、「会員全員で楽しい場を創り上げる」という構造へと転換させるためのものです。この転換こそが、コミュニティが持続的に輝き続けるための鍵となるのではないかと。